

エロシェンコ君を送る

エロシェンコ君は三日に北京を出た。彼は今回フィンランドにゆき第14回万国世界語大会に参加するので、九月には帰ってくる。だから彼のギター、長靴や布団は皆中国に残して、持って行かなかった。しかしこの漂泊の詩人が、中国の大砂漠に安住できるかどうかは、運命が彼を別の巡礼の長途にのぼるよう指示するかどうかは、断定するのは難しいと思う。だからわたしたちは彼が帰ってくるまでは、彼は中国にさよならしたのだとしばらくは認めざるを得ない。

エロ君は世界主義者であるが、彼は別れて久しい故郷にたっぷり切ない恋慕を抱いている。これは一見矛盾のようだけれども、とても深く厚い人間味を感じさせる。彼と家の兄姉との感情は極めて普通で、今度はモスクワにしばらく滞在するだけで、故郷には帰れないし、兄姉たちも会いにくる自由はない。しかしながら彼の郷愁はとても強く、別れて久しい“母なるロシア”にいつも口付けしたいと思っている。彼は何週間も駆けずり回って、それに同郷人のバイ君の助力を得て、二十何条かの策問になんとか合格し、ようやく北京における欧露の代表の許可を得て、ロシアに入ることができた。また京奉線の不通のために、大連まわりで奉天にゆくことにしたが、また日本政府がいちゃもんをつけるのを恐れて、北京の清水君の尽力で、日本公使に旅券への署名を頼み、大連及び長春一帯の通過を許された。世界語大会への参加証明書もすでに手続きを終わり、ただ中国のパスポートだけがまだ発行されず、後で発給してハルビン宛てに郵送することに決まり、諸事すべてが整い、彼はかくて三日に東駅から北京を出た。

京津線はいつも混んでいて、エロ君と同行の二人の友人が少し遅れたので、——実はまだ発車50分前だったのだが、すでに座席は一つもなかった。幸いなことに前に一両教育改新社の濟南行きの貸切があつて、そのなかに尹炎武君というのがいて、わたしたちは少し見識していたので、彼に相談したところ、彼が承諾してくれて、こうしてエロ君に座るところができて、無事に天津に着くことができた。これはとても感謝すべきことであつた。天津に着いてのちは、また陳大悲君にあつて、色々世話を焼いてもらった。こうして京津間はエロ君にとって幸運な旅だったと言えるだろう。

彼は四日に長平丸で天津を出発し、次の日の午後は大連に着いた。十一日『晨報』の大連通信によると、彼はその時ちょっとした“差し障り”に遭つたという。船が埠頭に着いたときに、彼と同行の友人上海の清水君とは、いっしょに日本の警察署にしょつ引かれ審問され、清水君は即刻監禁、彼は“半日の拘留”で、なんとか釈放となつた。天津からもう日本の私服警官がずっと彼にくっついて、釈放されてからもやはり一緒にハルビンに行ったという。彼は日本の全権公使の通過許可を持っていたので、大連で半日拘留されただけで、たぶんそれでもとても僥倖だったのであろう。清水君は三日も監禁され、七日の夜になってようやくハルビンに行くことを許された、——当然警官もくっついてだ。彼らがいつハルビンに着いたのか、途中はどんな様子だったのかは、わたしはまだ知らせを受けてないので、あてなく彼らの無事を祈るしかない。

エロ君が中国にいた時は、政府は特に注意を払わなかったが、これは実に賢明な処置であつた。セミヨーノフ派の“Bボス”や少数のものがずいぶん彼に反対していたけれども。しかし彼

はけっして危険人物なんかではない。これは彼の作品・談話・行動から見て取ることができる。彼は人類に対する愛と社会に対する悲しみを抱いて、つねに冷静な言葉と、熱烈な情調をもって、彼の愛と憎しみを描き出し、それによって外国の資本家・政府の忌諱に触れている。だがこれは彼らが疚しいからに過ぎない。彼は畢竟詩人である。彼の仕事は人々の胸に人類への愛と社会への悲しみを呼び起こすことに過ぎず、決して人を指揮して暴動やあるいは別の政治行動を起こそうというのではない。彼の世界は童話のような夢の世界であり、決して共産あるいは無政府の社会ではない。彼は現代に流行する幾つかの主義は必ずしも充分に実現できるものではないし、階級闘争もすべての問題を徹底して解決することは難しいことをも認めている。しかし彼はそのために現在の社会制度を是認するものではない。彼は現在に対する過大な不平をもって、未来に対する過大な希望を作り上げる。——この愛の世界はまさに別の主義のそれぞれの世界と同様実現することはできない。なぜならそれは彼らをはるかに超えているからである。太陽の中に行こうとした鷹、理想の自由を求めたカナリヤ、地上に出ようとしたモグラは、いずれも詩的なユートピアに憧れた者たちである。詩人の空想は社会改革の実行宣言とは違い、当然なんの危険もない。そして正當に言えば、こうした思想はとても道徳的価値が高く、現今の道徳が転倒した社会には極めて有用で、芸術的にはトルストイと比較することはできないとしても、源泉を共にする川の流れだと言うことができる。

以上はわたし個人の感想であって、ついでに言ったまでである。この小文はただ彼のフィンランド行きの記念であって、秋になって、彼が砂漠に帰ってきてギターをかき鳴らし、春の力を謳歌し、われわれがまた彼の歌声を聞ける機会を持てることを希望する。

エロ君という名称について、ある友人はわたしにふさわしくないと思うと言ったことがあるが、わたしたちはふだんから彼をそう呼び習わしているので、今はそのまま沿用した。一九二二年七月十四日。

※初出：1922年7月17日晨報副刊』